

琉球大学学術リポジトリ

写真や図を中心にみる琉球の農作物主要病害虫 (20)

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-07-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田盛, 正雄, Tamori, Masao メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/20941

写真や図を中心にみる

琉球の農作物主要病害虫 (20)

病 害

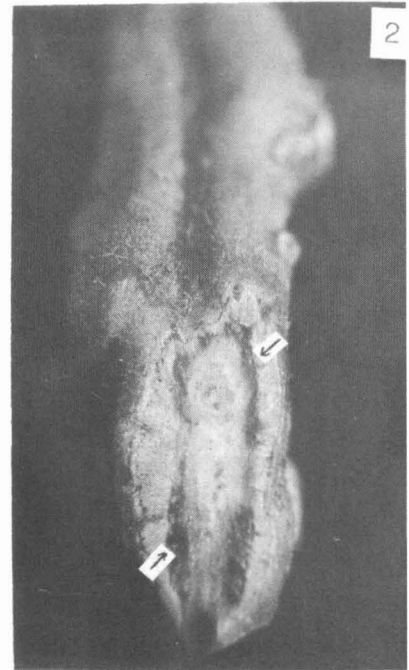
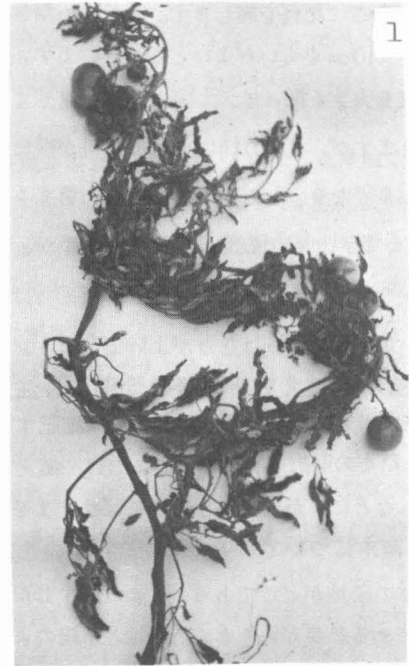
トマト萎ちよう病

宿主： トマトをおかす。

発生： 苗床では、移植時の苗に発生し、本畑に移植後は、収穫の終りまで発病する。トマト栽培地に広く分布している。発病適温は26～28°Cである。病原菌は土中に長く生存し、トマトの根から入って、種子について伝ばんする。また苗で伝ばんすることも多い。

病徴： 苗床で侵された苗は、発育がおとろえ、草丈短く、全体やせ形となり、葉は少し緑色があせ、新しい茎はしおれて曲り、下葉は枯れて垂れ下る。発病した苗の主根の先は、暗褐色に腐っている。また病気にかけた茎を横に切ると、維管束の部分は褐色に変わっている。しかし、青枯病のように汚れた汁を出すことはない。本畑に移植したあとの病株の病状は、気温と土湿によって異なり、気温が高くて土が湿っているときは、病勢がやや強く、前にのべた苗の病徴をあらわし、若い茎の萎ちようをみるが、気温が低いか、あるいは畑が乾燥しているときは、病勢はかんまんて、若い茎の萎ちようはほとんどみられない。トマトの発育は、ややおとろえ、茎葉全体淡い色になり、下葉から次第に黄変して枯れ上る。病株の茎を横断すると、維管束が褐色に変わっている。

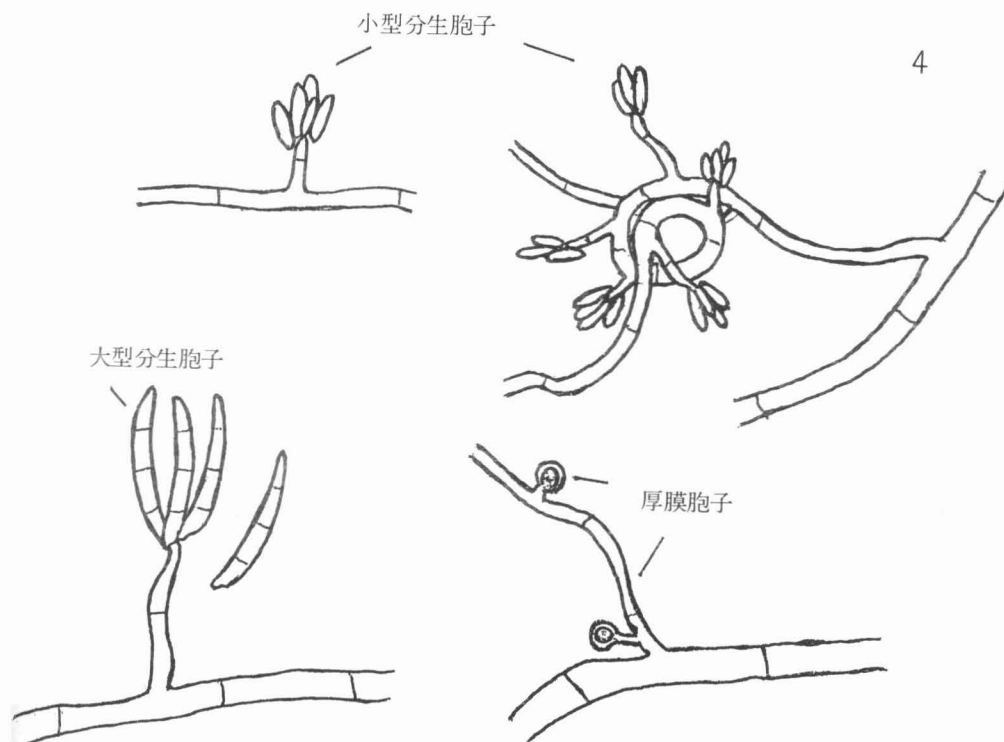
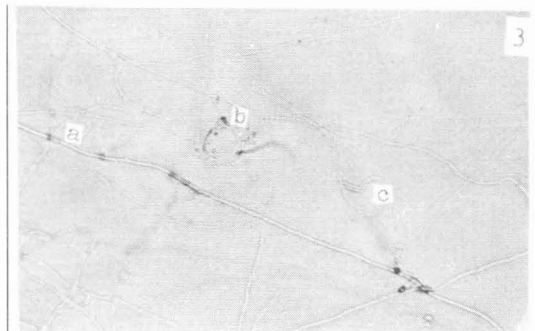
病菌： 小型と大型の分生孢子および厚膜孢子ができる。小型分生孢子は、無色、単胞、長だ円形あるいは長紡錘形で、長さ6～10ミクロン、幅3ミクロンである。大型分生孢子は、無色、長い鎌形、両端がややわん曲している。膜はうすくて、多くは3個の隔膜がある。長さは30～42ミクロン、幅3～4ミクロ



ンである。厚膜胞子は、無色、球形で膜は厚く、直径は約8ミクロン内外ある。

防除：

1. 種子は無病畑からとり、約2,000倍の有キ水銀剤で消毒する。
1. 苗床には、毎年新しい土を用い、もし苗床の土をそのまま次の年にも使用するときは、クロールピクリンで、播種の2週間前に消毒する。
1. 移植のときは、苗をよく選んで、無病のものを使用する。



図と写真説明

1. 萎ちよう病にかかってほとんど枯れた状態のトマトの株。
 2. 萎ちよう病にかかったトマトの茎をななめ横に切って褐変部分をあらわした。
 3. トマト萎ちよう病菌の顕微鏡写真(×150)：菌糸体(a)にまじって、小型(b)と大型(c)の分生胞子がみられる。
 4. トマト萎ちよう病菌の胞子のいろいろ。
1. 発病地は、約3年間トマトを作らない。
 1. 本畑で発病したら直ちに除き、そのあとの土にホルマリン20倍液を注いで消毒すると効果がある。
 1. 本畑には、移植前に消石灰を10アールあたり約19キログラムほどこするとよいといわれている。

(田 盛 正 雄)